

「おいでよ！森のがっこうへ」（大学の森をたんけんしよう！）

事業代表者：宇都宮大学農学部森林科学科・附属演習林長 教授 田坂聡明

構成員：宇都宮大学農学部森林科学科・附属演習林研究部主任 准教授 有賀一広

宇都宮大学農学部附属演習林 教授 小金澤正昭

宇都宮大学農学部附属演習林 准教授 飯塚和也

1. 事業の目的・意義

子供達の遊びの変化や都市近郊林の減少などにより、子供達が森林等の自然と触れ合う機会が減少している。

本事業では、様々な体験を通して私達の生活に必要な不可欠な森林や木材の価値を気付かせ、あわせて木材を供給する森林を育てることの大切さ、さらには、そのためには技術が必要であることを理解させることを目的に、大学の有する施設・設備と教職員のノウハウを活用し、学びの機会を提供することを目的とするものである。

2. 事業内容

(1) 高性能林業機械操作

フォワーダ、タワーヤーダ及びプロセッサという高性能林業機械の操作を体験し、様々な機械によって効率よく森林伐採を行うこと、森をまもりつつ伐採する技術を通じ、林業体験をした。



図1. 林業機械の操作体験



図2. 林業機械の操作体験

想像や図画・映像とは違い目の前で林業機械が動くことを実際に見て、自らが操作し体験することにより、日常ではなかなか知ることのできない職種への興味関心をもつことができる。

様々な木製物品に触れることがあっても、それがどのように作成されているかについて知る機会を得ることは難しく、また、木材からの加工ではなく、樹木自体がどのように伐採されているのかを知ることができる貴重な機会である。

(2) 木工体験

地元のスギ材を利用していくつかの制作物を例示し、ノコギリやカナヅチを使い、自力で作成する。ノコギリの使い方や釘の打ち込み方について、なぜそのように使うのか・打ち込むのかについて理解することにより、状況の把握能力や創造性を育てる。

このような木工をしたことのない児童も多いが、一般に売られている製品とは違う、自力で木材から制作したものはたとえ不格好でも愛着がわき、思い出の品となっていた。



図3. 木工体験

(3) 自然観察

自然の中で五感を使うネイチャーゲームを行い、自然の美しさやおもしろさ、山林と人間の関わりを学び、自然を直接体感した。

また、樹木や昆虫の生態について、その互いの関わりを観察し理解した。

(4) 川遊び

森林に源を発する小川に直接入り、川の生き物（沢ガニなど）を観察し、森林・水・生き物の共生状況を学んだ。



図4. 川遊び

(5) 丸太切り

木工にて体験したノコギリを利用した作業について、さらに太い丸太を自力で切り落とした。相当な労力を必要とするが、大半の児童が最後まで自力で行っており、自作の達成感を味わっていた。

最後に任意の焼き印を押し、記念品とした。



図5. 丸太切り

3. 事業の成果

児童達は、演習林の施設・設備等を活用して自然と触れあうことにより、普段何気なく使用している木材の成り立ちや、林業に興味・関心をもち、質問が大変多かった。

この事業により、森林や木材の価値を気付かせ、木材を供給する森林を育てることの大切さを知り、そのためには様々な職業と付随する技術が必要であることを理解

することができる。

事後アンケートにおいても、回答者36人のうち34人が「楽しかった」と回答し、33人が「また来たい」と回答するなど、参加者の反応は大変よかった。

また、本事業においては塩谷町の協力の下で、ジュニアリーダー（中学生）を派遣してもらい、ジュニアリーダーからも子ども達と触れあうことにより自らと違った視点からの発想などをうけることに大きな意義を見出していた。



図6. キャンプファイヤー

4. 今後の展望

附属演習林において行っている様々な教育・研究活動のうち、現在では林業を体系的に学べる施設・設備が備わっているのは他大学では類を見ない。これらの施設設備と豊かな自然を生かし、現代では都市部のみならず町村部においても都会的生活しか体験していない子ども達に、自然や林業を体験学習する機会を提供し地域に貢献することで、見識を広げる効果があった。

これをさらに発展させ、自治体等との連携を含め学びの機会を提供していきたい。